



3月の生活目標

『落ち着いた学校生活を送り、 感動的な卒業式を全員で創り上げよう』

～開二フェスティバル・卒業式を成功させ、クラス・学年・全校の力で今年度をまとめ上げよう～

とうとう3月、今年度もあとわずかです。目標は達成できていますか。さて、明日9日（木）には「開二フェスティバル」、17日（金）には1年間で最も大切な儀式行事である「卒業式」が行われます。

3年生は、義務教育9年間の集大成として、最後までその立派な姿を見せてください。

1・2年生は、3年生の背中からにじみ出る“何か”を感じ取り、今後の生活に活かしてください。今まで学んできたことを見せる最高の場ですので、練習から気を引き締めていきましょう！

★開二F・卒業式の服装に関して ※「特別な時だけ」はNG！！



服装・髪型をきちんとし、素晴らしい合唱や学習発表・卒業式にしましょう。バッジは大丈夫ですか。袖ボタンはついてますか。詰め襟のカラーはついてますか。首元から色シャツが見えていませんか。スカート丈は問題ないですか。靴下やタイなど服装の乱れだけでなく、髪型にも気をつかおう。それは普段から整えておくものです。

また、セーターやカーディガンを卒業式のときに着ることはできません。

★1・2年生へ ※中学校の卒業式とは・・・

中学校の卒業式は、義務教育最後の3年間を終え、一人一人がそれぞれの進路へ希望をもって巣立っていくとても重要な「儀式」です。担任の先生が一人一人の表情を見ながら最後の呼名をし、校長先生が全員に卒業証書を手渡します。もちろん、その一瞬の晴れ姿を目に焼き付けるために多くの保護者の方も参列されます。自分の子どもが生まれた時のことや、幼稚園・小学校の微笑ましい場面、そして思春期まっただ中の我が子との様々な記憶がよみがえり、涙する方も多いでしょう。2年生のみなさんは在校生の代表として参列します。そして君たちはその保護者の方々の隣に座るのです。1年生は当日は参列しませんが、予行で全校一同で3年生と卒業式を作り、態度と歌声で感謝を表します。



『一座建立』

茶道の世界で、招く人と招かれた人の心が通い合い、何とも言いがたい気持ちのよい状態が生まれることを、

「一座建立（いちざこんりゅう）」といいます。

「一つの時間・空間を一体となって創り上げる」



自分の考え・気持ちをはっきりと言葉で相手に伝えよう。

学年末試験終了後、職員室にある生徒が入ってきた時の言葉・・・「〇〇先生。ノート」

この生徒は、遅れてノートを提出するために職員室を訪れたようですが、さて皆さんならどのような言葉を使用するでしょうか。TPOに応じた適切な言い方としては・・・

「〇〇先生。ノートを期限内に提出をすることができませんでした。」

遅れてしまい申し訳ありません。受け取っていただけますでしょうか」

皆さんの日常生活を振り返ってみてください。そのような場面はないですか？自分の考えや気持ちをきちんと相手に言葉で伝えることが大切です。うまく伝えられないことによりトラブルが発生したり、小さな勘違いから仲たがいにしたりしてしまうこともあります。そんなことをなくすためにも、「言葉の使い方、伝え方」に気を付けてみてください。



都立一般入試(1次・前期)、学年末考査 終わる！

3年生にとっては勝負の一番、都立高校の一般入試が終了し、各学年の総まとめである学年末考査が終了しました。目標に向けて計画的に学習に取り組み、満足のいく結果が出せましたか？

プロサッカーの三浦知良選手は先月26日で56歳となり今シーズンを迎えた。15歳で単身サッカー王国ブラジルへ渡り、プロの選手となった。それから40年、日本代表のエースにまでなった選手が50歳を過ぎてこうインタビューに答えていました。

『大事なのは、50歳だからすごいとか、これまでの実績や、何試合出たかということよりも、いま、毎日何ができているのか、どういう生活をしているのか、あるいは、どういう気持ちでサッカーをやっているのか、情熱をもってトレーニングができているのか、何をどう続けられているかです。』

三浦選手の新たな1年は、シーズンが終わるとほぼ同時に始まります。今シーズンはなんとポルトガルリーグに挑戦するという驚きの移籍を果たしました。

今年の自主トレでも、自分はまだまだ甘いし、弱さもある。そういうのを克服するために自主トレをやっているんです、と。元メジャーリーガーのイチロー選手やスキージャンプの葛西紀明選手もそうですが、彼らもまた日々の現状に満足せず、常に次の目標に向かって努力を続けているのでしょう。何を伝えたいかということ・・・



“1つの大勝負が終わっても、新たな目標に向かい

努力を続ける・・・(学習にも終わりはないということ)”

★明日は開二フェスティバル！合唱・総合発表・学習展示！楽しみです★

テストも終わり、一気に合唱や卒業へ向けての取り組みが本格的にスタートしました。合唱は、ただ大きい声で歌っていても聴き手を感動させることはできません。学年の1年間を振り返り、学んできたことや伝えたいメッセージがにじみ出てくるような合唱を創り上げるためには、練習過程で心を一つにし、気持ちを伝えあっていく必要があります。明日は各学年最高のハーモニーを体育館に響かしてください！また、学習発表の代表に選ばれたみなさん。緊張もあるかと思います。リハーサルで確認できたことを活かして堂々と発表してください！

もうひとつ・・・あの日を忘れないために・・・

ぜひ、裏面を読んでみてください。

2011. 3. 11(金)14:46・・・

憶えていますか「東日本大震災」のあの瞬間。それからの大変な生活（東北では今現在も）。みなさんは何を学び、何を実践していますか。あれから10年余りが経ちましたが、決して風化させてはいけません。復興は急速に進みました。開二フェスティバル当日、会場となる体育館に全校生徒が集まっている最中に地震が起きたら、落ち着いて対応できますか？今年の開二フェスティバルは3月9日です。自分たちの合唱を創り上げるとともに、あの日を思い出し、被災された方々に思いをはせることも大切なことかもしれません。

「いつまでも繋がらない母の携帯電話」

震災前は宮城県名取市に住んでいた67歳の恵子さんと3人の孫は、現在仙台市内の親せきの家に身を寄せている。名取市といえば津波によって街全体が壊滅された場所である。震災前は恵子さんと38歳の紗恵子さん、そしてその子供である14歳の直也くん、12歳の沙奈ちゃん、9歳の美咲ちゃんの4人暮らしだった。お父さんを病気で亡くした子供たちは、それでも元気に暮らしていた。そんな平和な一家から大津波は幸せを剥ぎとっていった。

恵子さんと3人の孫はなんとか無事だったが、紗恵子さんは未だ行方不明のまま。避難所で暮らしていたころは、同じ被災者によく言われた。

「結局両親とも亡くしてしまうことになって、3人は大丈夫かね」

「まだ母親は亡くなったわけではないよ。行方不明なだけさ」

恵子さんはそんなふうに答えたけれど、心の内側ではやっぱり無理だろうと思っている。

「上の二人はなんとなくねえ、理解してるんだけど・・・」

親しい人と顔を合わせるごとに愚痴がでる。

「9歳の美咲がね・・・」

教育方針として、3人の孫には携帯電話を持たせていなかった。昼間働きに出ている母親と連絡をとるとき、子供たちは、「おばあちゃん、電話かして」と恵子さんの携帯電話から連絡をしていた。

震災後、しばらくは「お母さん、どこにいるのかな」などと、無邪気に話していた孫たちが、10日もすると一切口にしなくなった。昼間は元気に遊んでいる子供たちも、夜になると母親のいない寂しさから泣き続けることもあった。上の二人は「お母さんはもうこの世にはいないだろう」と悟っているようだった。でも9歳の美咲ちゃんだけは決して涙は見せなかった。気丈に耐えている・・・というのではない。母の無事を信じているのだ。

美咲ちゃんは夕方になると必ず恵子さんの携帯電話を持って一人おもてに行く。恵子さんは気になって後をつけたことがある。美咲ちゃんは避難所となっている小学校から、少し離れた場所にある高台に行って電話をかけていた。「もしもし、ママ元気ですか？」

繋がらない携帯に言葉を吹き込む次女。被災地ではまだまだ携帯電話の電波状況が悪く、街の高台に行かなければ繋がらない。美咲ちゃんが向かった場所は近隣でも唯一なんとか電波をとらえることができるスポットだった。いつ行っても携帯を持った人たちが何人かいる。美咲ちゃんはそのに着くと、折りたたみ式の携帯電話を開けて母親に電話をしていたのだ。もちろん、「おかけになった電話番号は、現在電波の届かない場所か、電源が入っておりません」というメッセージが流れるばかり。それでも美咲ちゃんは母親への言葉を吹き込んでいた。

「もしもし、美咲です。ママ、元気ですか。美咲は元気です。早く帰ってきてね」そう言うと少し安心するのか、三咲ちゃんは携帯電話を閉じて小学校にもどって行く。そんな孫の姿を見ても何もしてやることができない。恵子さんは津波を心から憎んだ、ある日、避難所で生活している孫たちの会話を聞いて恵子さんはまた胸が痛んだ。「ねえお兄ちゃん、電波の通じない場所ってどこ？」「さあ、地下とかかな？」「天国じゃないよね」「なに言ってるの美咲？」姉の沙奈ちゃんが不思議そうな顔をした。

恵子さんだけは美咲ちゃんの質問の真意を理解することができた。美咲は携帯電話から流れる「電波の通じない場所か電源が・・・」のメッセージのことを言っているんだ。

でも何も言ってあげることができなかった。

震災直後、被災現場に多くの自衛隊員が入った。最初の数日は死体の処理が主な仕事だった。次に道をふさいだ煉瓦などの処理。その際、ぐしゃぐしゃに破壊された家屋の残骸などは重機で処理していくが、持ち主のはっきりしない個人の品々はそれ以上傷つかないように、一つ一つの手で拾い集めて保管していった。ランドセル、体育館シューズ、金庫、アルバム、携帯電話・・・ありとあらゆる「誰かの大切なもの」を自衛隊員たちは分類整理していた。

3月11日から数週間経過し、被災した方々も少し落ち着きを取り戻し始めたころ、各家庭の流失品を学校の体育館や公民館などで公開するようになった。街の人たちはそれらの場所を見て回り、自分や家族のものを探るのである。そんな中から、恵子さんと3人の孫は宝物を発見したのだった。

「最初は夢かと思った」それは何百枚という写真だった。津波に飲まれ。泥まみれ。水に濡れているからフニャフニャの状態だったが、それでも写真はきれいだった。重なったままで乾いたからだろう。写真と写真がぴったりと貼りついて、引き剥がそうとすると破れてしまうものもあった。一枚一枚、洗っては干し、洗っては干し・・・。大人が手伝おうとしても孫たちは「自分でやるから大丈夫」と触らせなかった。写真は全部で二百枚以上あった。中には紗恵子さんの結婚式の写真や成人式の写真も。

現在仙台市の親戚の家にすんでいる3人の孫は、そこから学校に通っている。9歳の美咲ちゃんの勉強机の前にはお母さんの成人式の写真が飾られている。「私も20歳になったらこんなふうにかわいくなるかなあ」ときどきそんなことを言う。この写真が見つかったから、美咲ちゃんはお母さんに電話することがなくなった。心の中で一区切りついたのかもしれない。でももちろん、悲しみが完全に癒されたわけではない。

最近新しく通い始めた小学校で、授業参観が行われた。母親の代わりに見に行った恵子さん。教室には恵子さんと同じような事情を抱えた保護者が何人かいた。「うちの孫たちだけがつらいんじゃないんだ」東北が抱えている悲しみの総体はいったいどれほどのものなのだろう。考えてもせんないことだが・・・やはりそこに気持ちが及んでしまう。

先生が生徒たちに向って質問した。「みなさんのいちばんたいせつなものは？ 思いついたものをこの紙にかいてください」小さなプリントが配られた。後ろから覗いてみると、「ゲーム」「おもちゃ」などと書く子供が多い中。美咲ちゃんだけは『いのち』と書いていた。

美咲ちゃんのいちばん大切なものを津波はたくさん奪っていった。お母さんはまだ行方不明のまま。でも孫たちの心の中ではお母さんは『いのち』をもって生きてほしい。恵子さんはそう祈るばかりだ。